


武蔵国幡羅郡米五斗

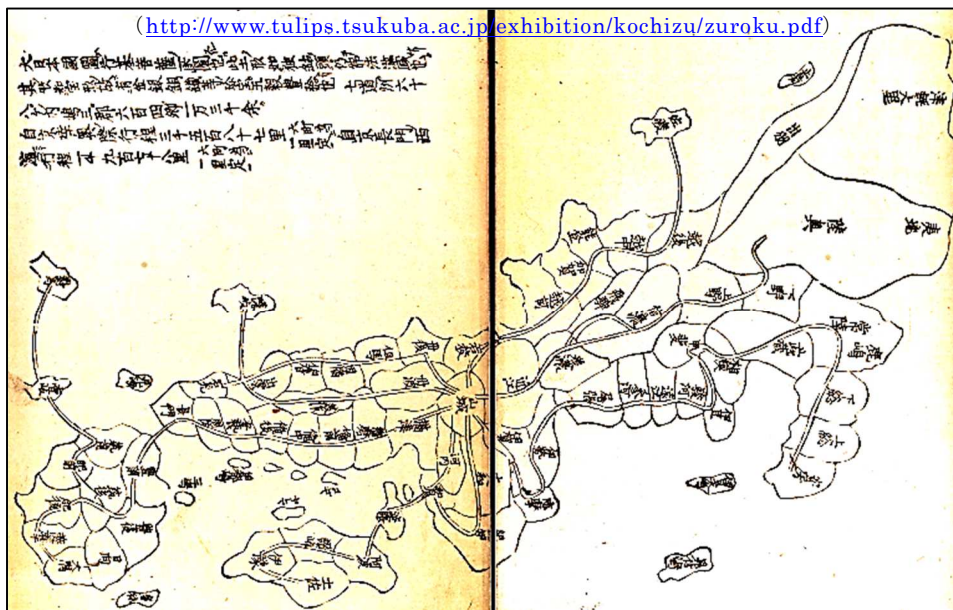
下図は「多賀城碑のなぞを探る!」より引用した多賀城碑です。

<http://www.tohoku-kaido.com/miyagi/miyagi-img/pdf/20121201houkoku.pdf>

(参考資料)	多賀城碑の内容		拓本 出展:多賀城市HP
読み下し	翻刻	拓本	
<p>西</p> <p>多賀城</p> <p>京を去ること一千五百里</p> <p>蝦夷国の界を去ること一百二十里</p> <p>常陸国の界を去ること四百十二里</p> <p>下野国の界を去ること二百七十四里</p> <p>群馬国の界を去ること三千里</p> <p>神亀元年歲は甲子に次る、按察使・兼鎮守將軍・從四位上・兼大野朝臣東人之置く所也。天平宝字六年歲は壬寅に次る、參議・東海東山節度使・從四位上・仁部省卿・兼按察使・鎮守將軍藤原惠美朝臣朝葛、修造する也。</p> <p>天平宝字六年十二月一日</p>	<p>西</p> <p>多賀城</p> <p>去京一千五百里</p> <p>去蝦夷國界一百廿里</p> <p>去常陸國界四百十二里</p> <p>去下野國界二百七十四里</p> <p>去群馬國界三千里</p> <p>此城神龜元年歲次甲子按察使兼鎮守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也</p> <p>天平寶字六年歲次壬寅參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝葛修造也</p> <p>天平寶字六年十二月一日</p>		

この中の作文応募大賞「西」は何を意味しているのか?」の中に、「同時代の日本地図ではないかとされている行基図は日本が東西に芋虫のように長く寝そべっており地図の体を成していませんがそれによると多賀城とおぼしき所よりほぼ西に山城京が描かれています」とあり、西は「時の天皇淳仁」を指すのではないかと考察が書かれていました。

<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/kochizu/zuroku.pdf>

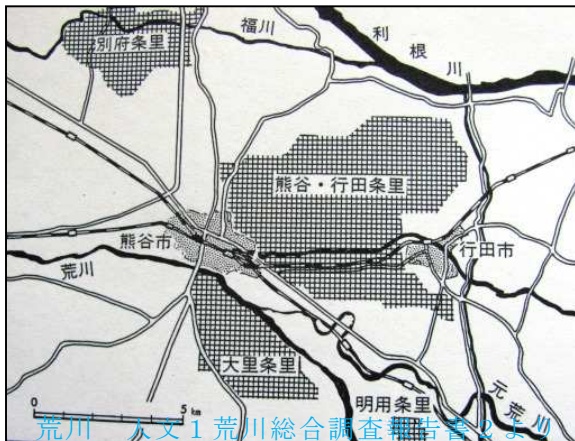


左図は筑波大学附属図書館の「古地図の世界」で紹介されている行基図(拾芥抄)で、明るさと色彩を調整しています。その形は現在の地図よりも日本列島が右回りして寝たようになっています。



この陸奥の多賀城跡から、表側に「武蔵国幡羅郡米五斗……部領使□□刑部古□□（万呂カ）、裏側に「大同四年（809）十□（二カ）月」と書かれた木簡が見つっています。左の写真は熊谷市史からのもので、明るさや色彩などを調整しましたが、「米五斗」くらいしか読めませんでした。

この米を作るための田の条里制は班田収受制に伴って実施されたのではないとの見方もありますが、遅くとも8世紀中（743年：ウィキペディア）からは実施されたようです。



左図は「荒川」に載っている熊谷市近辺の条里遺跡のあるところですが、幡羅郡には別府条里が見えます。幡羅郡の名から深谷市を中心としたものと考えられるように思いますが、実際の深谷市の大部分は榛沢郡に属していたと思います。

郡家（ぐうけ）跡の幡羅遺跡は平成13年（2001）深谷市で最初に発見されましたが、それ以前の昭和38年（1963）に熊谷市の西別府祭祀遺跡と平成2年（1990）

に西別府廃寺跡が見つっています。

熊谷市では郡家の遺跡の予備調査を平成15年（2003）に行い、平成16年（2004）から調査を開始して幡羅遺跡と関連のあると思われる遺跡を見つけているようです。そうして、郡家と古代寺院の西別府廃寺遺跡と西別府祭祀遺跡の三つの遺跡が揃った貴重な遺跡群であることが分かりました。

この三つが揃った遺跡は全国でも数少なく岐阜県弥勒寺官衙遺跡群（美濃国武儀郡家）に次いで2例目の遺跡となったようです。

幡羅郡から多賀城に運ばれた米は、幡羅郡の別府の田んぼで作られた米と思われる。別府の条里、「熊谷市史前篇（1963）」では、東別府が61町歩で西別府が1町歩となっていて、東別府が中心であったようですが、それ以外の幡羅郡の中には条里の跡は見えないようです。

その後、承和元年（834）の続日本後記に「武蔵国幡羅郡、荒廃田百廿三町、奉充冷然院」とありますが、多賀城に米を送った後の弘仁9年（818）に、武蔵

国を含む関東一円で大地震があって、その地震で荒廃田になってしまったのかもしれない。

「御料地史稿」(明治から昭和戦前期に皇室財産である御料林の管理経営を行っていた「帝室林野局」で編纂)に記載されている、“武蔵国播羅郡の荒廃田百二十三町を冷然院に宛てられたるを以って初見となし、其の後、属々別勅を下して之を定められたり”とあり、別勅符を貰っていた可能性も考えられます。播羅郡に残る別勅符の地はこの別府の地に比定できるかもしれません。

東別符嫡家系図によると、「家忠 播羅郡主、後冷泉院平康年中追討奥州安倍貞任高宗任の時属源義家朝臣下向関東是ヨリ子孫播羅郡居住」とありますので、家忠は確認できない人ですが、別符氏の基となった人は康平 5 年(1062)頃に別府の地に入ってきたように思われます。

別符氏が承和元年(834)の冷然院への奉充の時から別府にいたのか、約 230 年後の家忠の時に別府に入ってきたのか分かりませんが、伝えられている書状や旅宿問答の中でも「古別府」の文言が見えますので、別符氏の前に別符氏がいたようには思われます。

9 世紀前半の播羅郡荒廃田の冷然院領を別府の地と考えると、123 町であったものが、後から入ってきたと思われる別符氏が、13 世紀初頭の別符兄弟相論の時には本名田は 124 町ですが余田(開墾した土地)を含めると 2 倍に近い 225 町 3 段と新たな田地を開発したようです。

<http://himakuma.ina-ka.com/index.html>